シンポジウム「米国イラン対立激化
～中東と米国の視点～」

2020年1月28日

上智大学国際関係研究所主催

発表者：東　大作（上智大学教授）
前嶋和弘（上智大学教授）
司会：安野正士　（上智大学教授
国際関係研究所長）

後援：科研費「平和構築と政党」

シンポジウム「米国イラン対立激化
～中東と米国の視点～」

2020年1月28日

東　大作
教授
上智大学国際協力人材育成センター副所長
上智大学グローバル教育センター
上智大学国際関係研究所
上智大学人間の安全保障研究所

「米国とイラン、対立の構図と日本の役割」

今日の主な内容

1）本日の発表骨子（イランと米国の対立要因）

2）拙著「内戦と和平―現代戦争をどう終わらせるか」

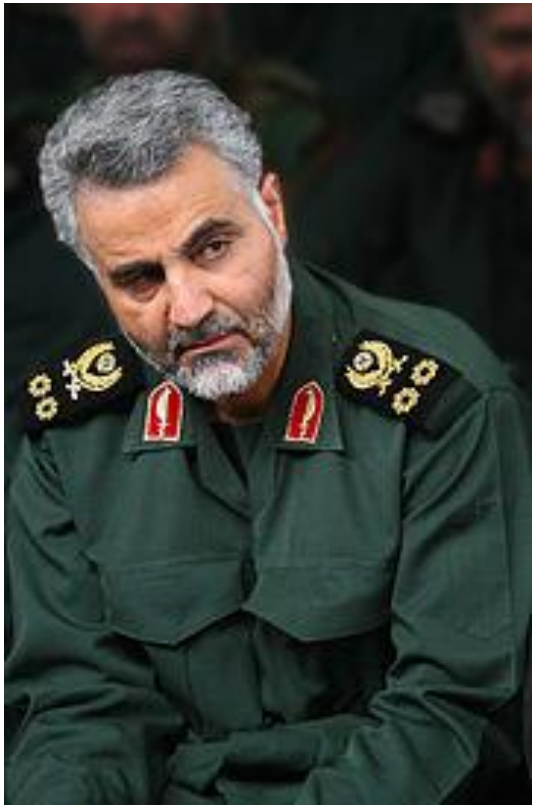
3）イラクへの米国侵攻とイランの勢力拡張

4）シリア内戦の情勢

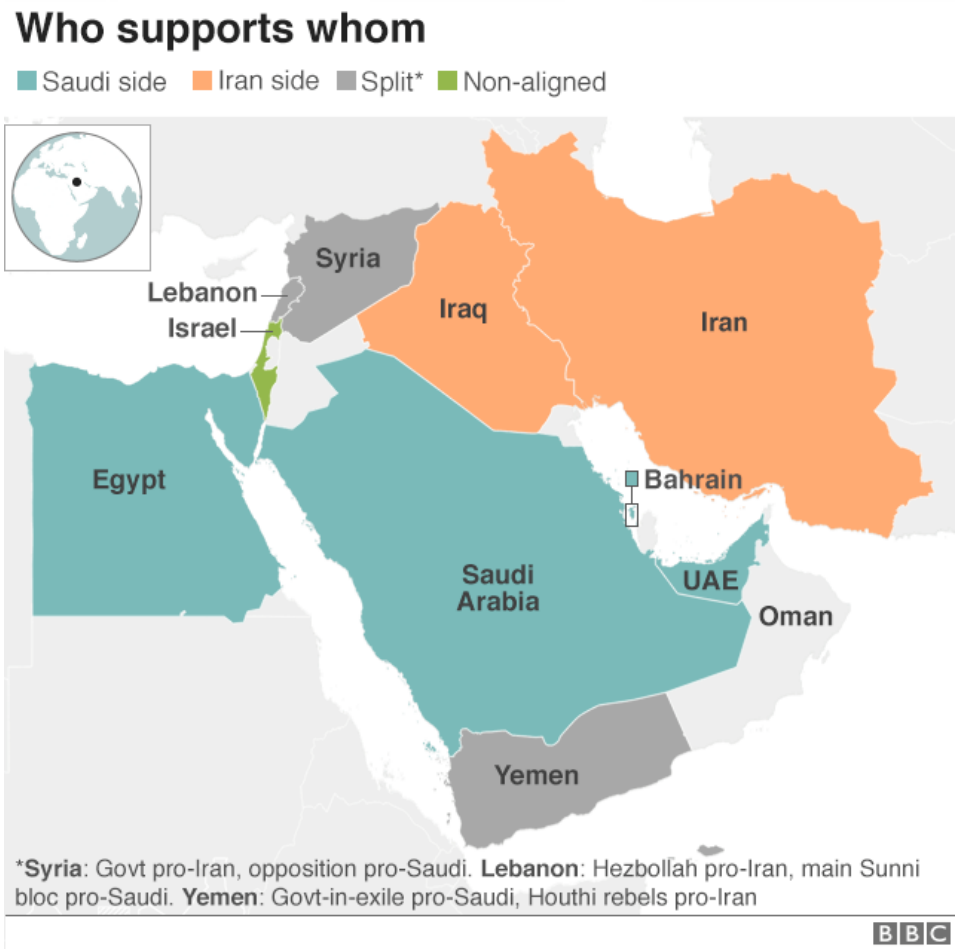
5）イエメン紛争予防の失敗

6）日本の役割は？

2020年1月3日
イランのスレイマニ司令官殺害



米国とイラン対立激化の背景
サウジアラビアとイランの覇権争い

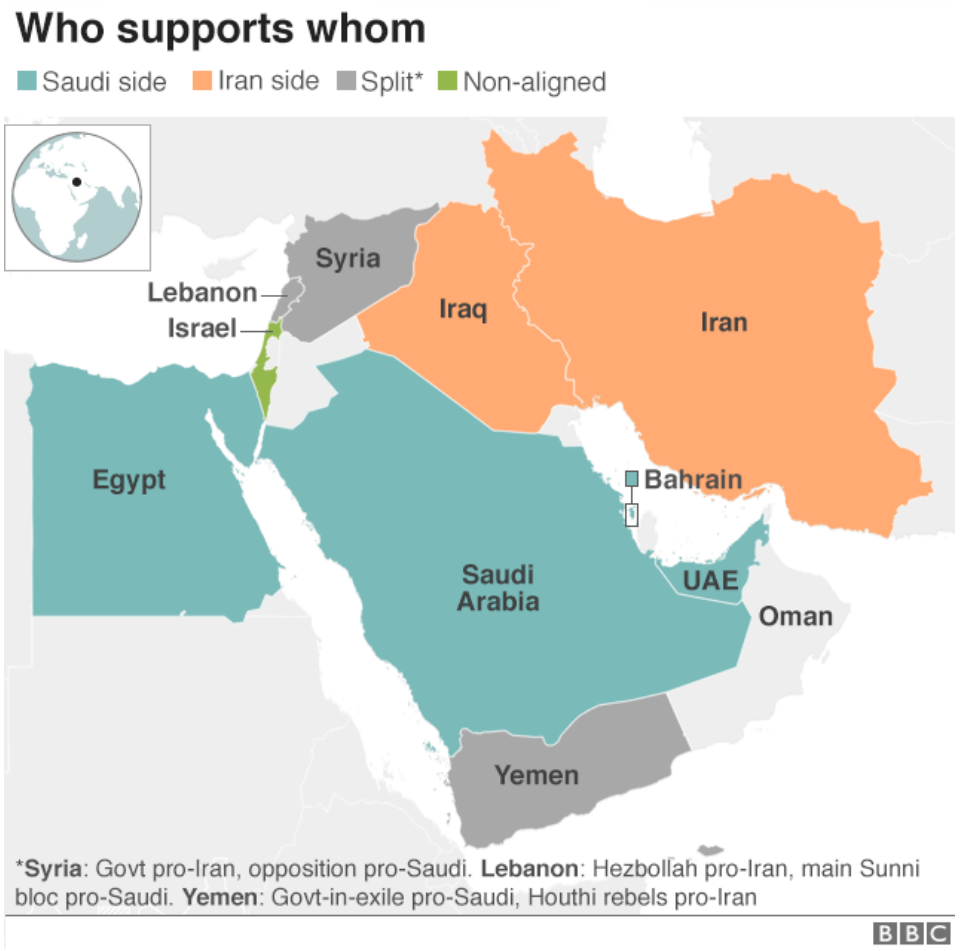


イラン革命とイラン・イラク戦争

<u>１９７９年</u>：イランで、シーア派による
「イスラム革命」。 王政を打倒

<u>１９８０ー８８年</u>：イラン・イラク戦争
スンニ派のイラク・フセイン政権がイラン
と血みどろの戦闘

米国とイラン対立激化の背景
サウジアラビアとイランの覇権争い



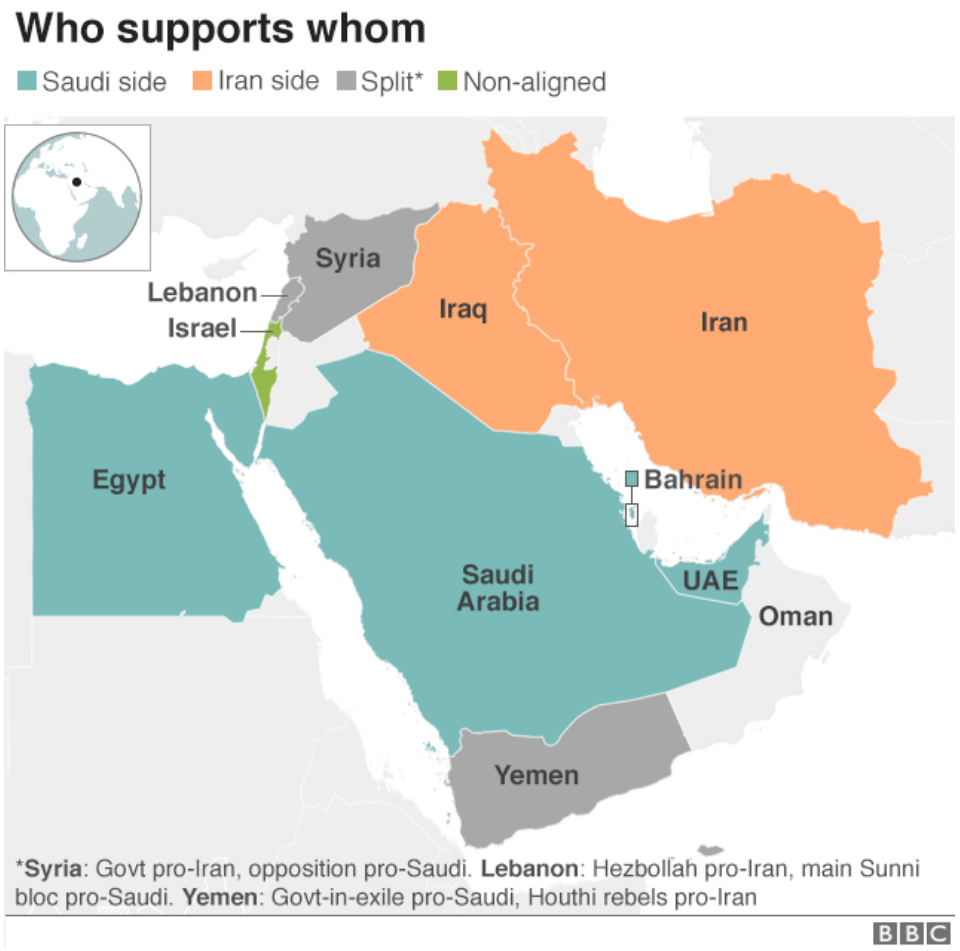
サウジとイランの覇権争い

米国が２００３年にイラクに侵攻。フセイン政権転覆。民主化。

→イラクが、スンニ派主導からシーア派主導の国に変わった（シーア派が多数派なため）

サウジやUAE(アラブ首長国連邦）などに「イラクをイランにとられた」という認識と危機感。

米国とイラン対立激化の背景
サウジアラビアとイランの覇権争い



イランの勢力拡大

シリア内戦（2011年～）：内戦が始まり、サウジやUAE、カタール、トルコ、などは反体制派を徹底して支援。他方、イランとロシアは、アサド政権を支援（2015年にロシア軍事介入）

→現在、アサド政権が多くの領土を回復。

イエメン内戦（2015年～）：イランに近いとされるホーシー派が、6州の連邦制導入に反対して武装蜂起。サウジとUAEが軍事介入し、泥沼の内戦に。

サウジやUAE、イスラエル

「結局、イランが一人勝ちしているという脅威」

「２０１５年イラン核合意」までは、イランは国連や米国・EU等・による経済制裁→それでも勢力拡大

「２０１５年イラン核合意」によって、イランが自由に石油を輸出できるようになれば、さらにこの地域での勢力が拡大されるという警戒・恐怖。

2017年トランプ米政権発足

米トランプ政権：歴代の米政権でも、最もサウジアラビア及びイスラエルと近い

2017年5月：最初の外国訪問がサウジで、そのままイスラエルを訪問

米国とサウジ：サウジが米国の武器約11兆円分を直ちに購入、10年で約35兆円分購入で合意

イスラエル：米国がエルサレムを首都とし、米国大使館移設（他も徹底した親イスラエル政策）

イラン核合意廃棄

2018年5月：米トランプ政権が、イランが核合意を履行しているにもかかわらず、「核合意」を離脱→イラン産石油の輸入を禁止

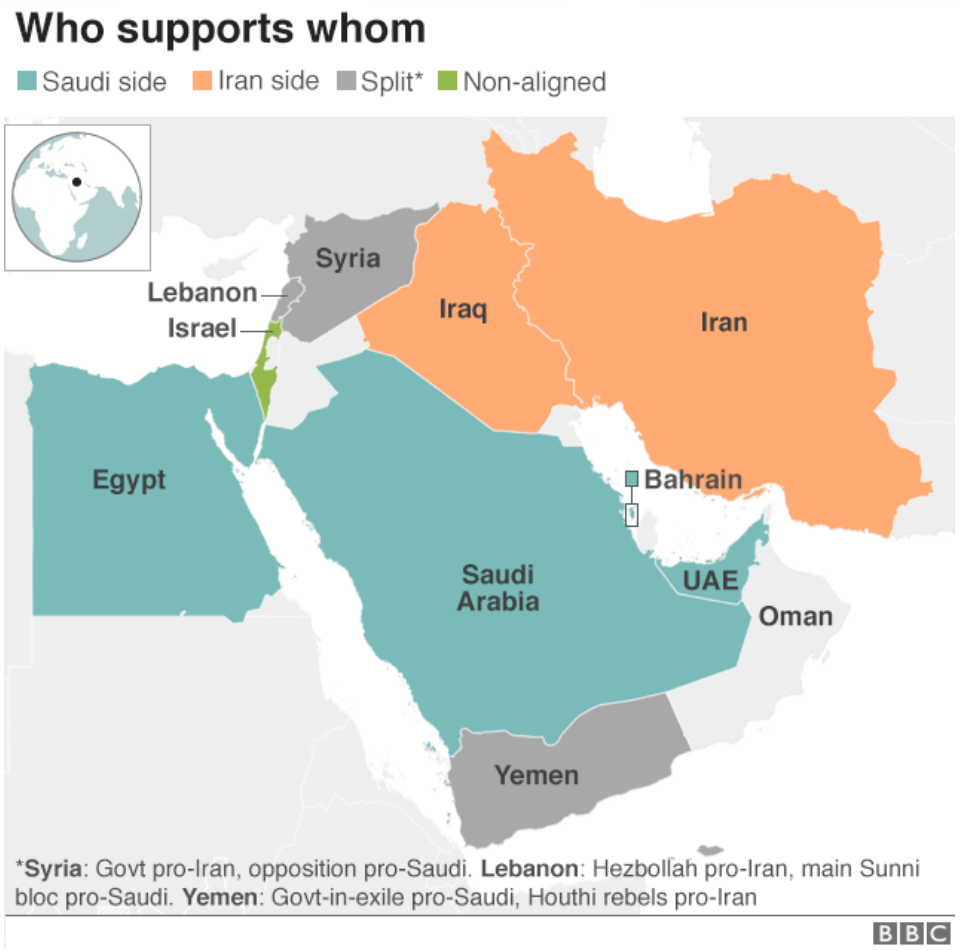
2019年5月：一部の「適用除外」打ち切り

→イランの石油輸出は極めて困難に

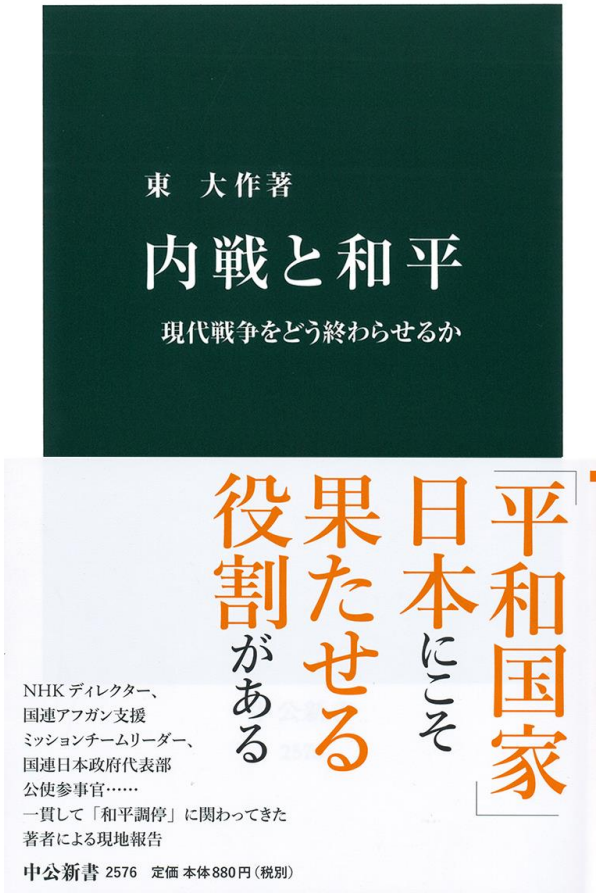
その後、イランや、その支持勢力とみられるグループからサウジなどへの攻撃。

2020年1月：イランのスレイマニ司令官殺害

米国とイラン対立激化の背景
サウジアラビアとイランの覇権争い



「内戦と和平―現代戦争をどう終わらせるか」（中公新書） 2020年1月20日



「内戦と和平―現代戦争を終わらせるために」（中公新書）

- ２００９年に「平和構築」を出版
- 今回は、紛争下の「和平調停」にも焦点を当てて、イラク、シリア、イエメン、アフガニスタン、南スーダンなどでの現地調査をまとめた。
- 他方で、カンボジア、東テイモール、シエラレオネ、コロンビアなど比較的和平プロセスが進んでいる国も扱っている（５章）。
- ６章（最終章）「グローバル・ファシリテーター」としての日本の役割を提案。

「内戦と和平」議論①「包摂性」

紛争後の平和構築:

→幅広い勢力、宗派、グループが参加する包摂的なプロセスが極めて重要

紛争下の和平調停:

→影響力の大きなグループでまず合意してから、他のグループにも交渉するなど柔軟性も時には必要

例:南スーダン2018年和平合意

　アフガンにおけるタリバンと米国の交渉

「内戦と和平」議論②「誰が調停？」

紛争後の平和構築:

→国連が中心的な役割を担う方がベター

紛争下の和平調停:

→周辺国や大国が、「国連特使の仲介を歓迎」と言いつつ、徹底した軍事・財政支援する場合、軍事紛争は維持・拡大する（「国連の濫用」）

→周辺国や大国が一枚岩になる必要

例:シリアやイラク

イラクへの訪問（2018年2月）

イラクは2003年にアメリカの侵攻以来、内戦が続く。

50万人以上が内戦によって亡くなったと言われている。

2001年9月11日同時多発テロ

World Trace Center
11 Sep 2001

イラクにおける平和構築

- ２００３年３月にアメリカ侵攻
- イラク国軍の廃止（４０万人失業）
- バース党の廃止（国家官僚組織の崩壊）

➔ 非常に排他的な平和構築

イラクのその後

- ２００５年１月　総選挙・移行政権発足

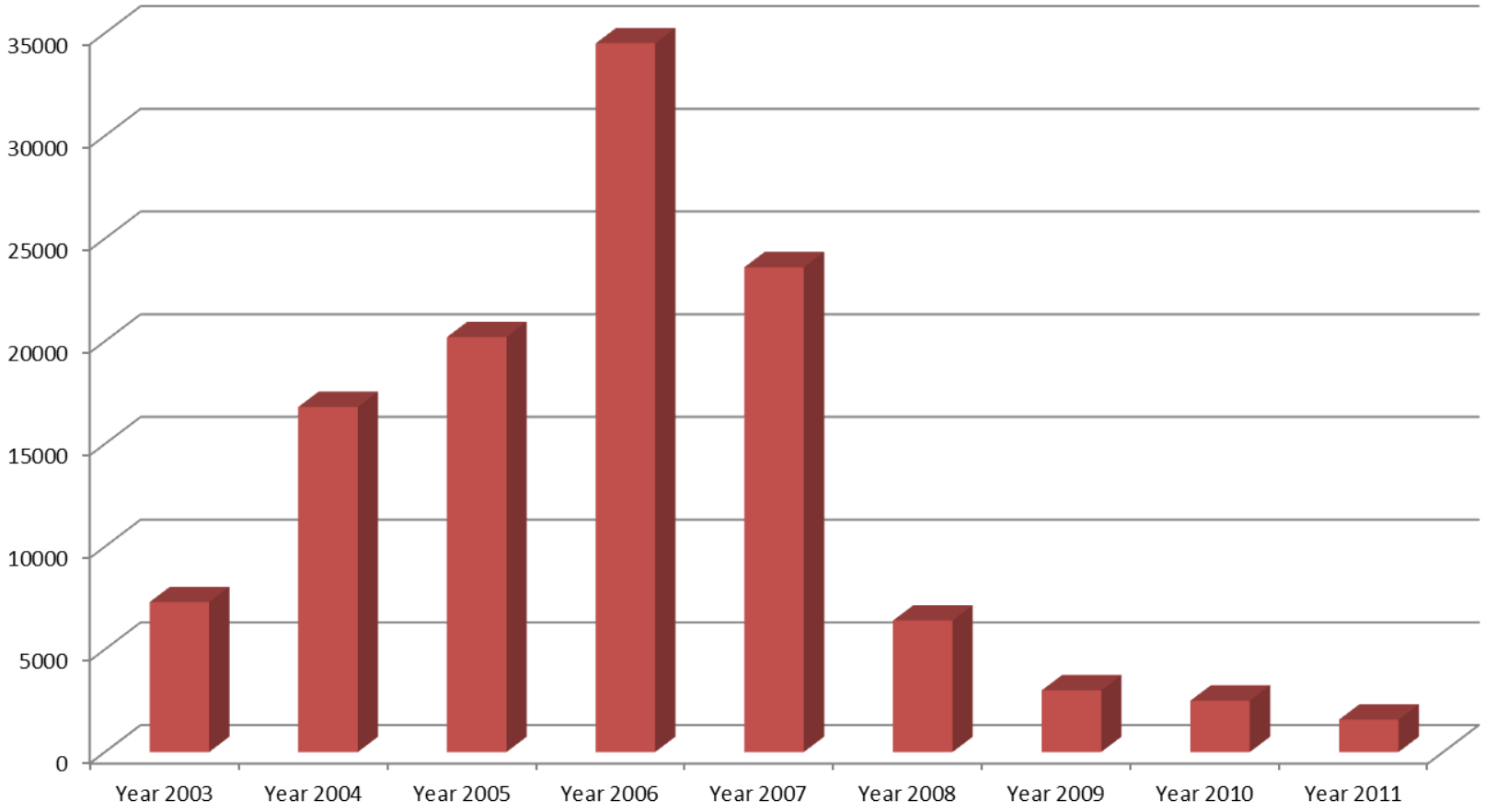
- ２００５年１０月　憲法採択国民投票

- ２００５年１２月　総選挙
- ２００６年５月　マリキ新政権発足（シーア派）

➡<u>その後、イラクは内戦に突入</u>

マリキ首相（2006年ー2014年）
2003年前はイランに亡命
シーア派（イランと密接な関係）

イラクにおける民間人の死者 2003-11



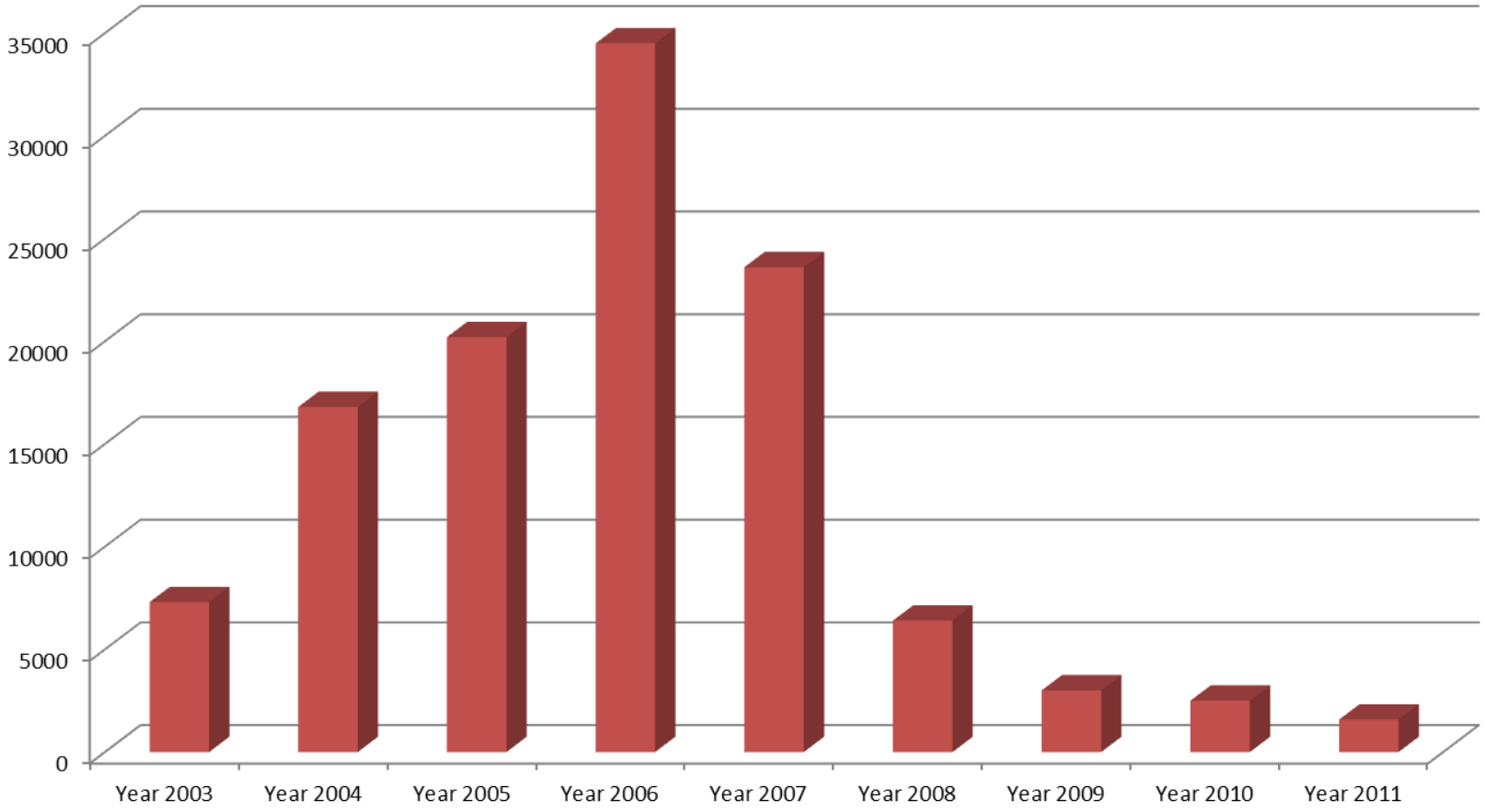
イラクにおける米軍の方針転換

- ２００７年

  スンニ派の反政府武装勢力約10万人を、「イラク覚醒評議会」に属させ、一人あたり月約３００ドルを支払い。

➔その後劇的に、治安が改善された

イラクにおける民間人の死者 2003-11



イラクその後（２）

- **２０１１年末　アメリカ軍撤退**

➔マリキ政権が、スンニ派の排除を開始。

スンニ派の副大統領：Tariq al-Hashimiや

財務大臣の Rafie al-Issawiの追放。

スンニ派の武装集団に対する支払停止

.

ISIS

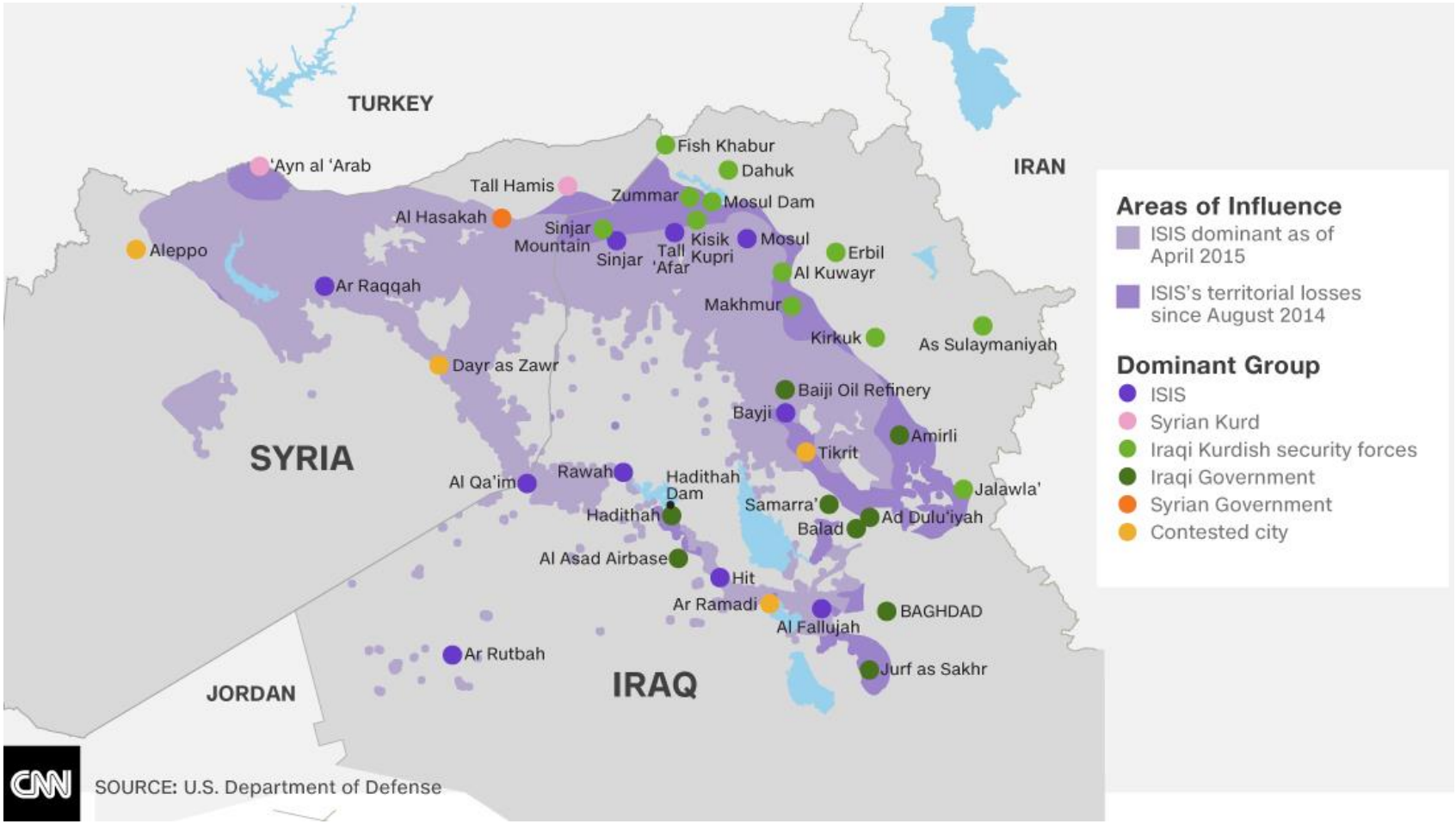
- ２０１４年にイラクの約3分の１を、自称イスラム国（ISIS)が、支配。

➔オバマ米大統領は、「イラクには、スンニ派との協調する包摂的な政府（Inclusive Government)が必要である」

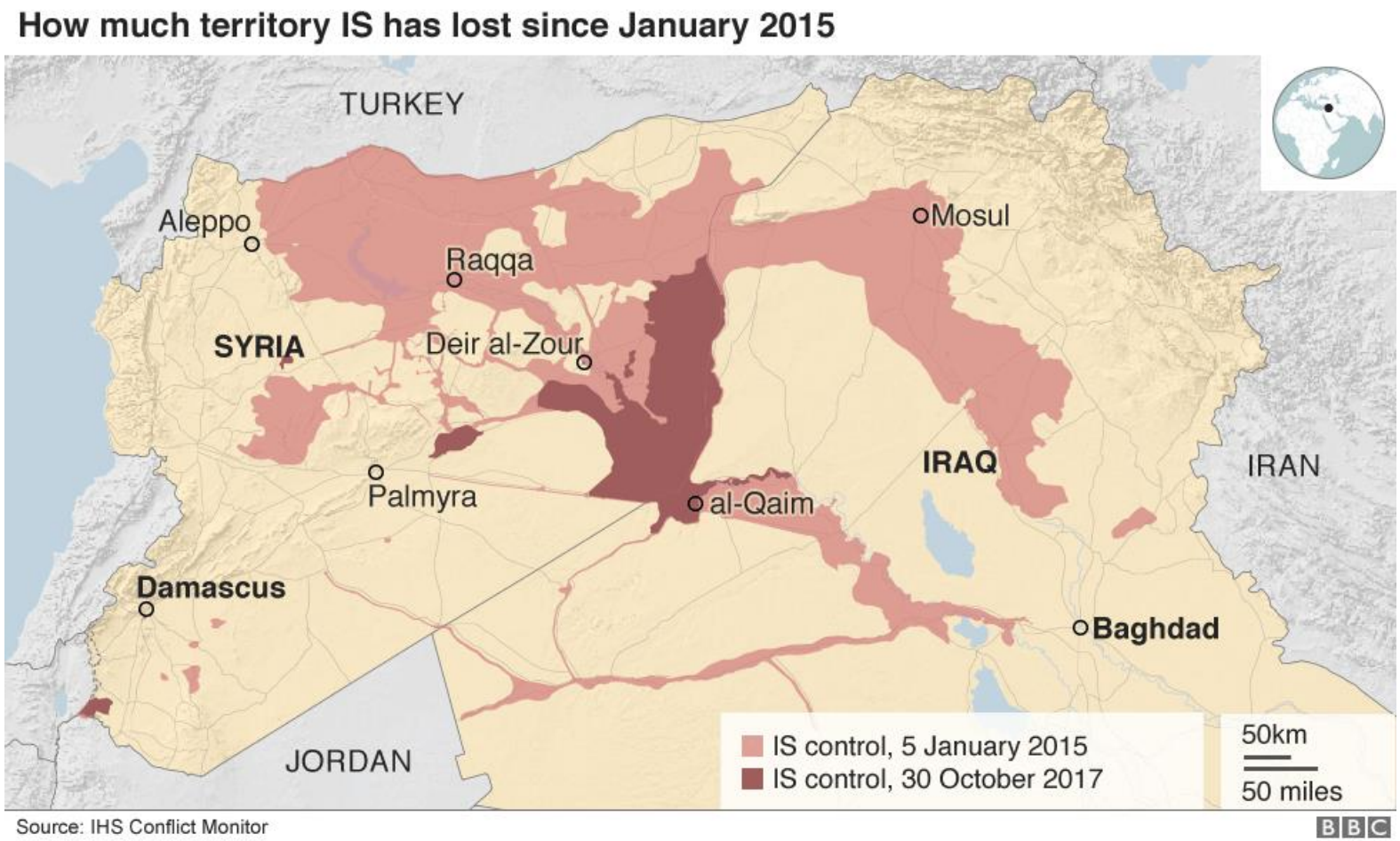
- ２０１４年８月：マリキ首相退任

➔アバーディ首相が就任

ISIS支配地域（2015年）



ISIS 支配地域 2015→2017



私のイラク訪問（2018年2月）

２０１８年２月に、外務省の公務派遣で、イラクの首都バグダッドを訪問。ISIS後の、イラクの平和構築について、知的交流を行うことが目的であった。

バグダッド、アルナハラ国際戦略研究所での基調講演 (2018年2月19日)

バグダッド (2018年２月１９日)

３人の副大統領と個別会談 (2018)

マリキ副大統領
（シーア派）

ヌジャイフィ副大統領
（スンニ派）

2018年イラクでの懇談

アラウイ副大統領　　タラバニ党首
(世俗派)　　（クルド)

イラクの国会議員選挙2018

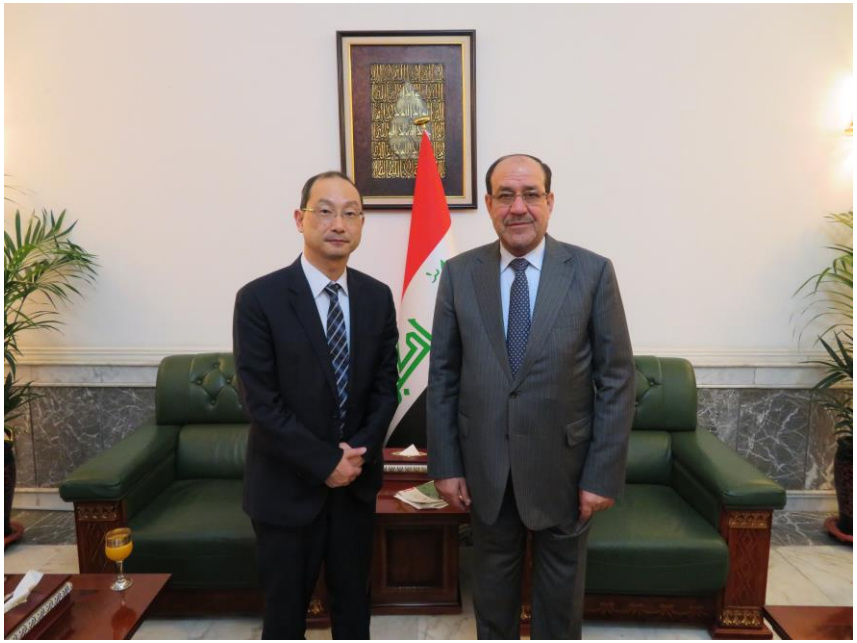
２０１８年５月：イラク国会
議員選挙実施

２０１８年１０月：Abdul
Mahdi 首相が選出される

2019年2月、二度目のイラク公務派遣

アバディ元首相

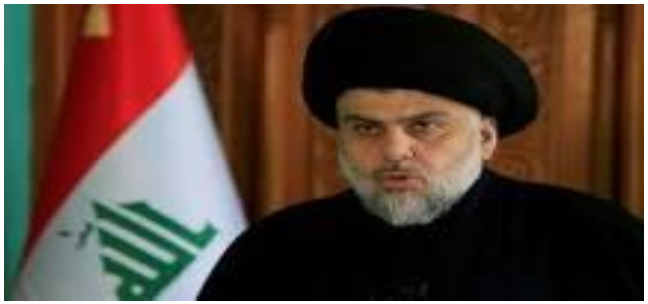
マリキ元首相



イラクの国内政治 (2019年)

Alliance of Reform（改革）

(Al Sadir) **広範囲外交**



Alliance of Construction（建設）

(Al Amiri) **イランと密接**

イラクの国会議員選挙2018

２０１８年５月：イラク国会議員選挙実施

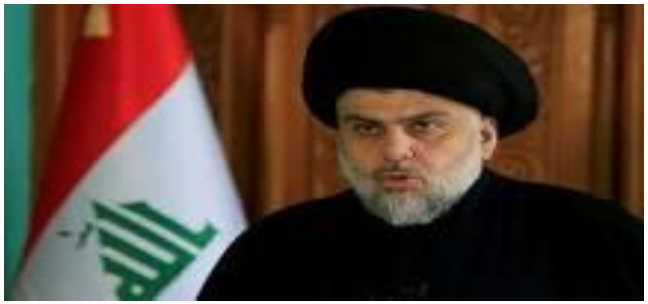
２０１８年１０月：Abdul Mahdi 首相が選出される

「改革」と「建設」の双方から支持される首相として

イラクの国内政治 (2019年)

Alliance of Reform（改革）

(Al Sadir) **広範囲外交**



Alliance of Construction（建設）

(Al Amiri) **イランと密接**

バグダッド大学での講演
２０１９年２月１８日

2019年2月18日

２０１９年２月の議論

イラクにおける宗派対立はかなり収まったという議論が多数派

（シーア派が「建設」と「改革」に割れた）

（シーア派もスンニ派も、イスラム国と共に戦った。）

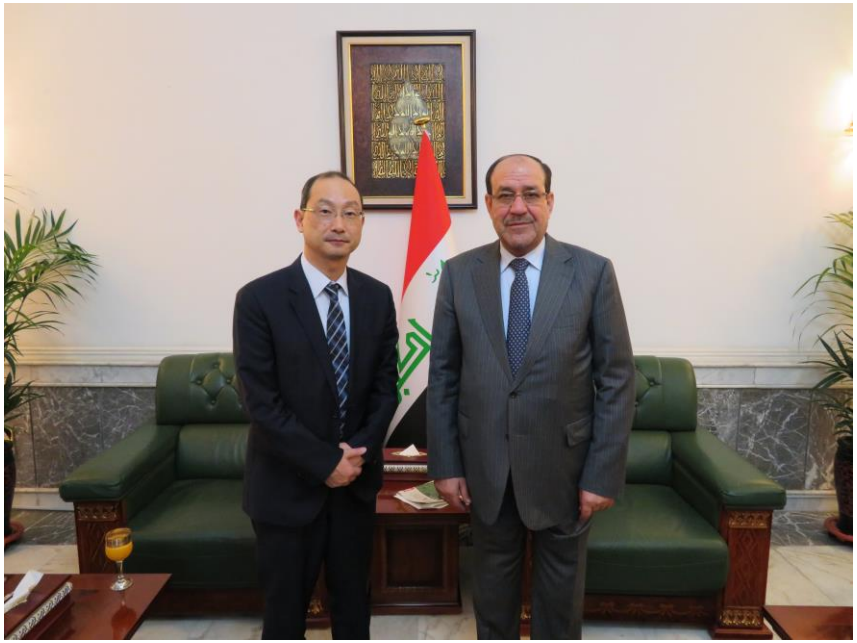
２０１９年２月の懇談

（２０１９年度懇談時）

米国に対する激しい批判

「米国とイランの対立が激しくなれば、それがイラクの平和構築に大きな悪影響を及ぼすだろう」

マリキ元首相（「建設」のNo2）



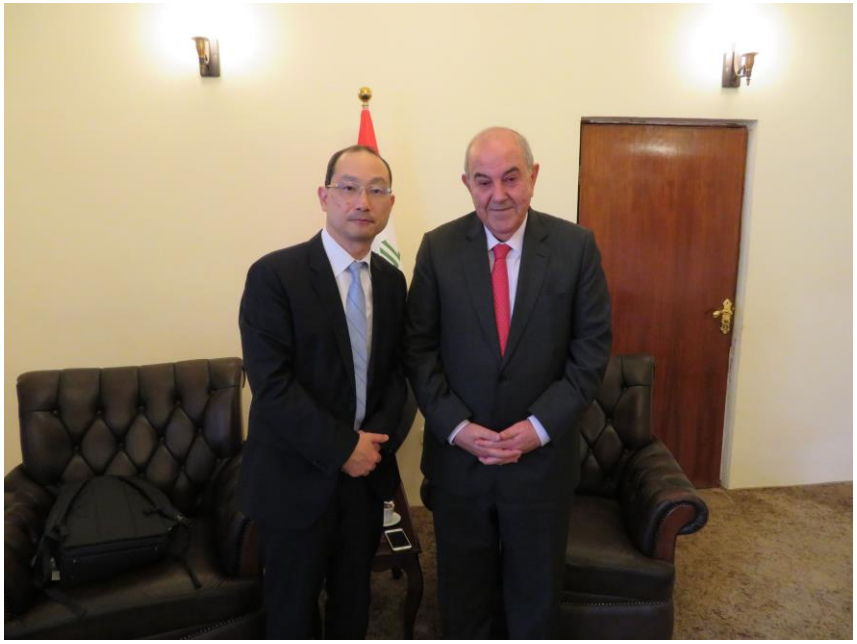
2019年2月の段階の警告

警告

アラウィ元首相（世俗派）

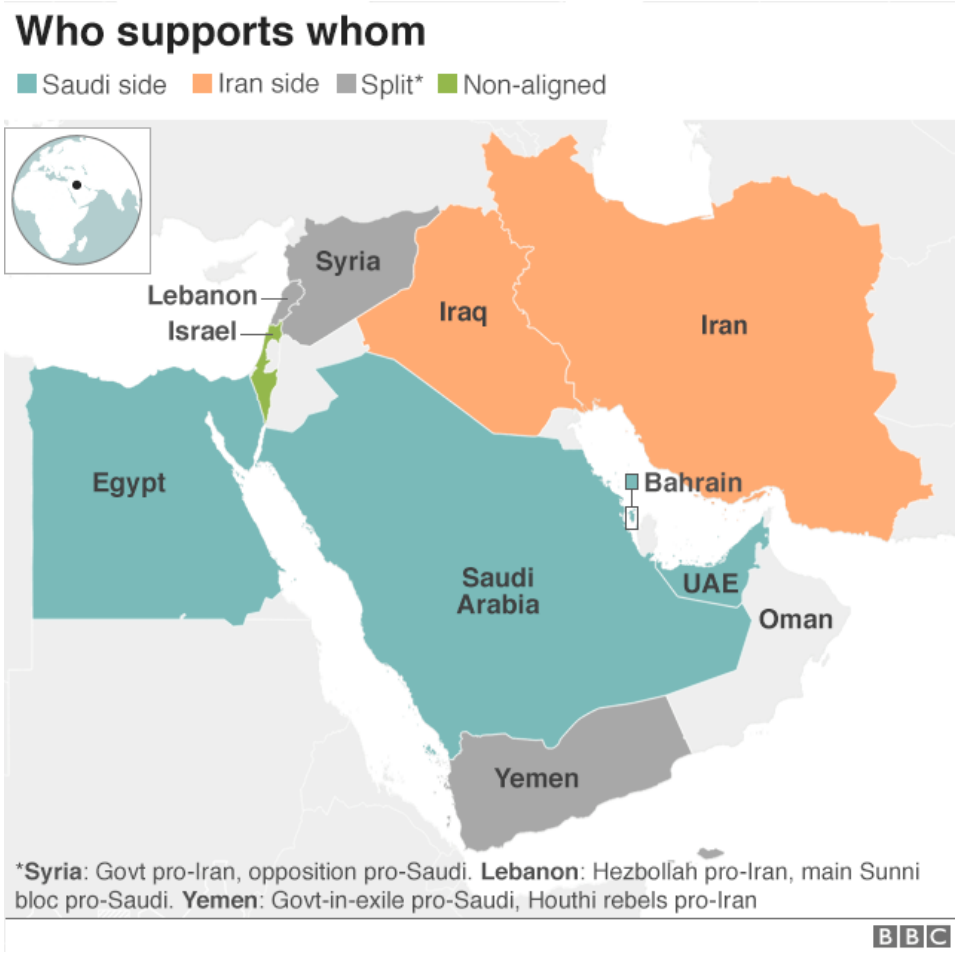
「マリキ元首相やアメリ氏など『建設』主導の現政権は、実際にはイランの傀儡政権だ。」

「真の国民和解には程遠い。いずれ不満が爆発する。」



２０１９年夏からイラク各地で激しいデモ（数百人が死亡）

米イラン対立激化


Who supports whom
Saudi side
Iran side
Split*
Non-aligned
Syria
Lebanon
Israel
Iraq
Iran
Egypt
Bahrain
Saudi Arabia
UAE
Oman
Yemen
*Syria: Govt pro-Iran, opposition pro-Saudi. Lebanon: Hezbollah pro-Iran, main Sunni bloc pro-Saudi. Yemen: Govt-in-exile pro-Saudi, Houthi rebels pro-Iran
BBC

シリア内戦

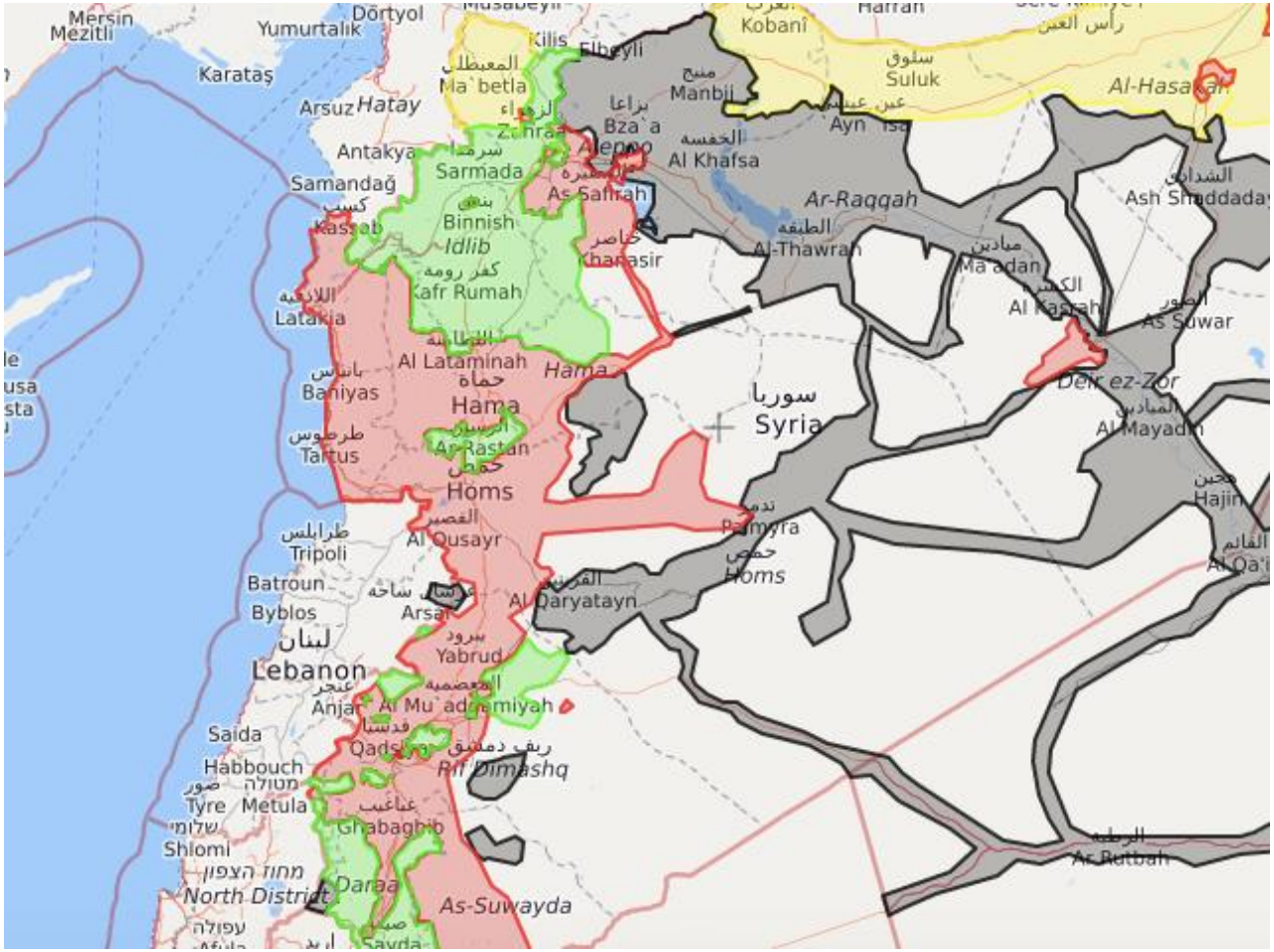
シリア内戦：２０１１年に勃発

サウジアラビア、アラブ首長国連邦、カタール、トルコ、米国、EUなどが、反体制派を支援

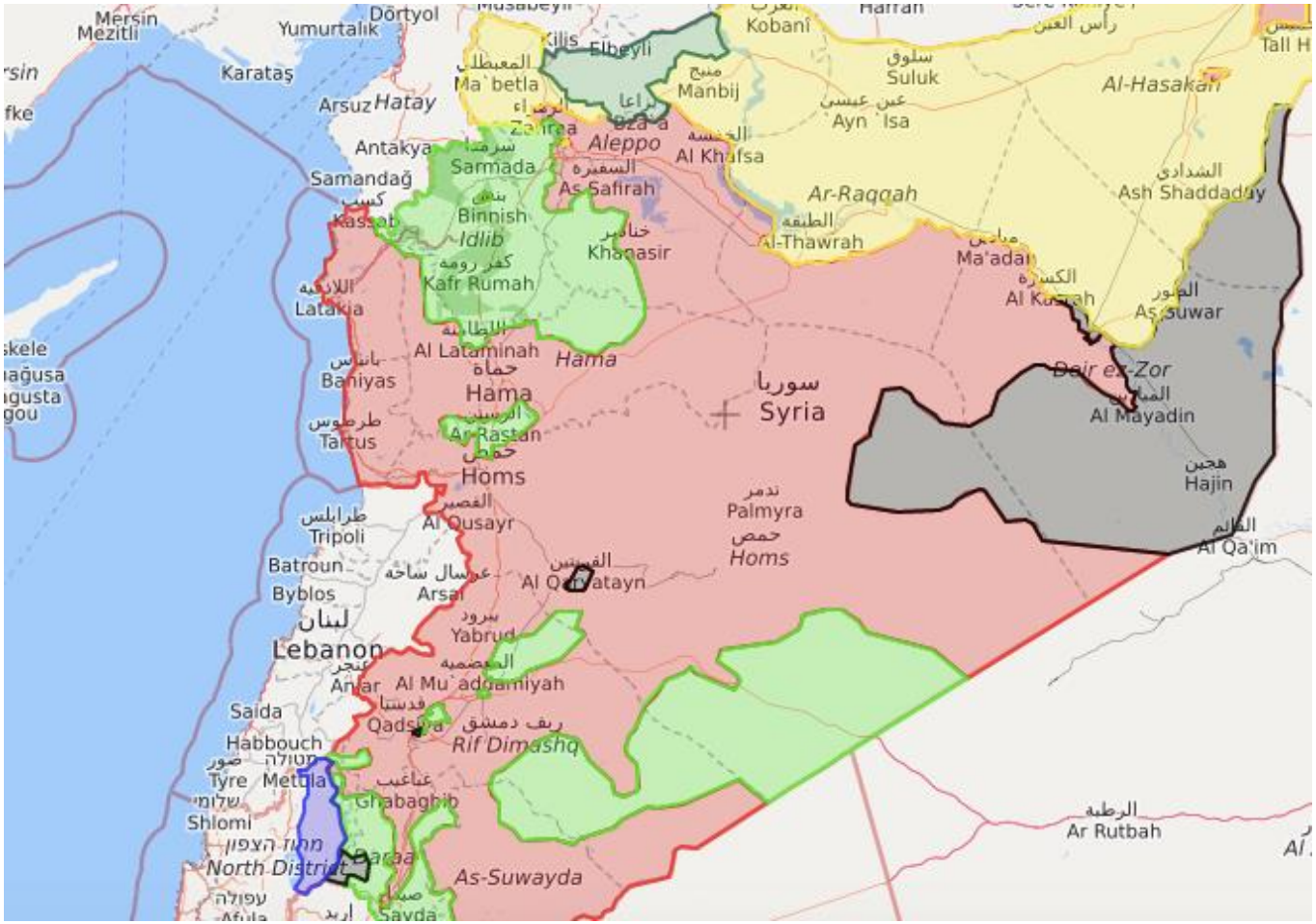
イランとロシアが、アサド政権を支援

（２０１５年にロシアが軍事介入）

シリアの軍事情勢
(2016年1月)



シリアの軍事情勢
(2017年10月)



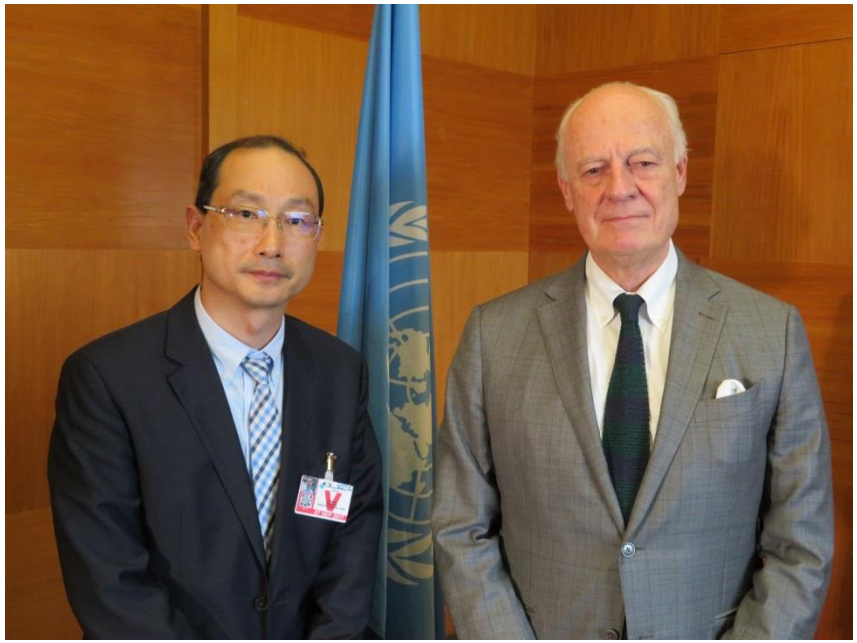
2017年夏、レバノンでの調査（シリア難民の人々への聞き取り）

レバノン（2017年）

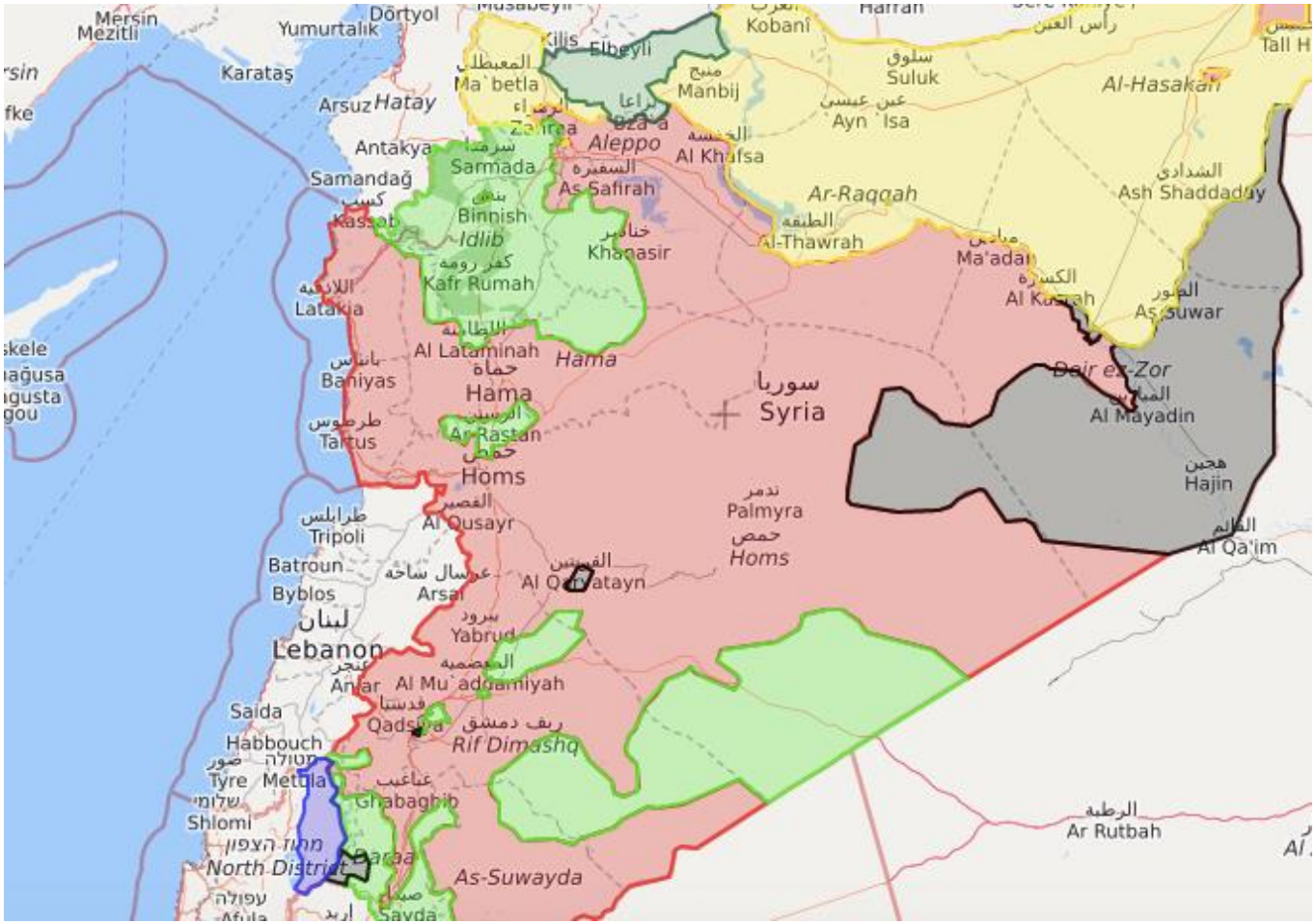
レバノン（2017年）

ジュネーブで各国大使館に聞き取り
デミツラ国連シリア特使 (2017年９月）

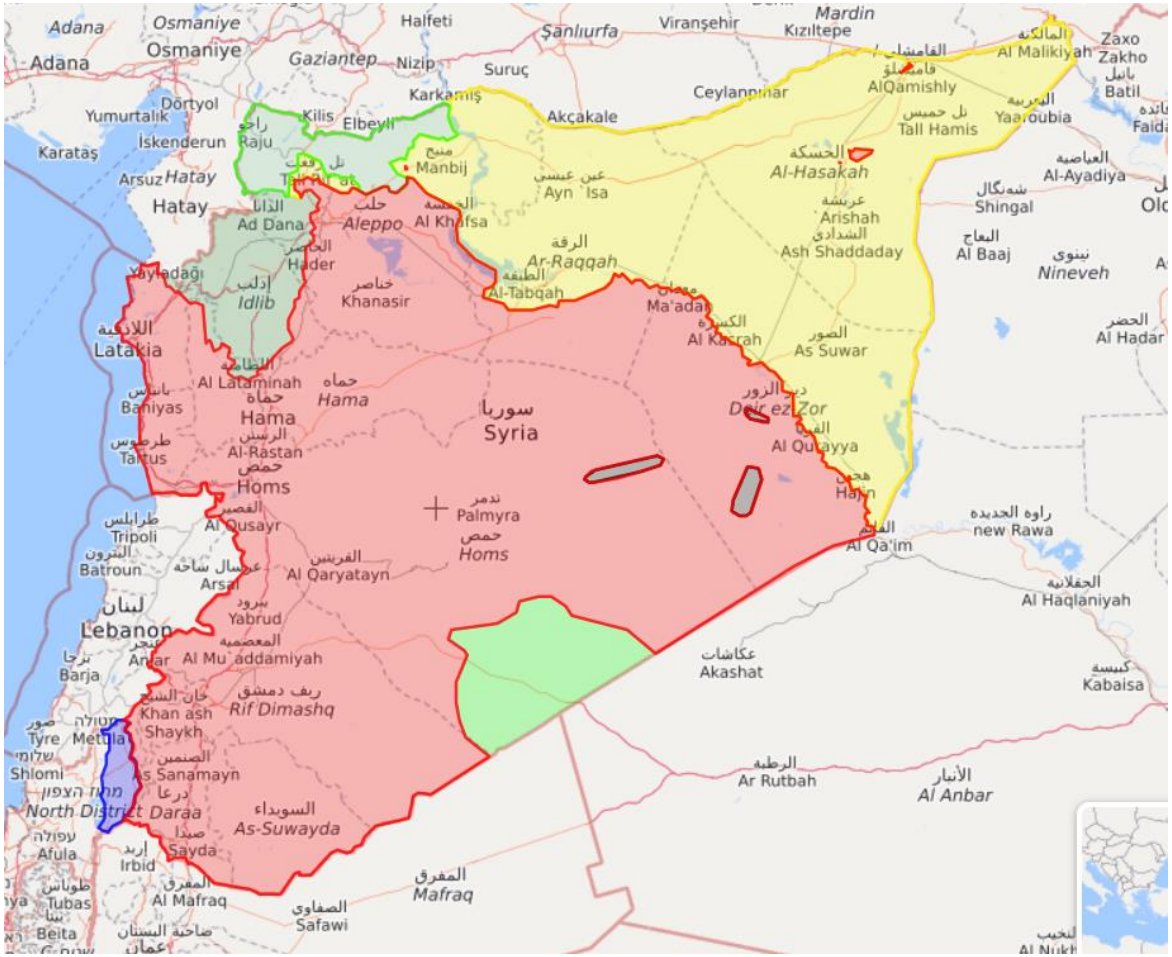
「アサド政権の軍事的勝利に終わる可能性があることを否定できません。しかし政治的な合意がなければ、スンニ派の不満は残り永続的な反政府活動が続くでしょう」



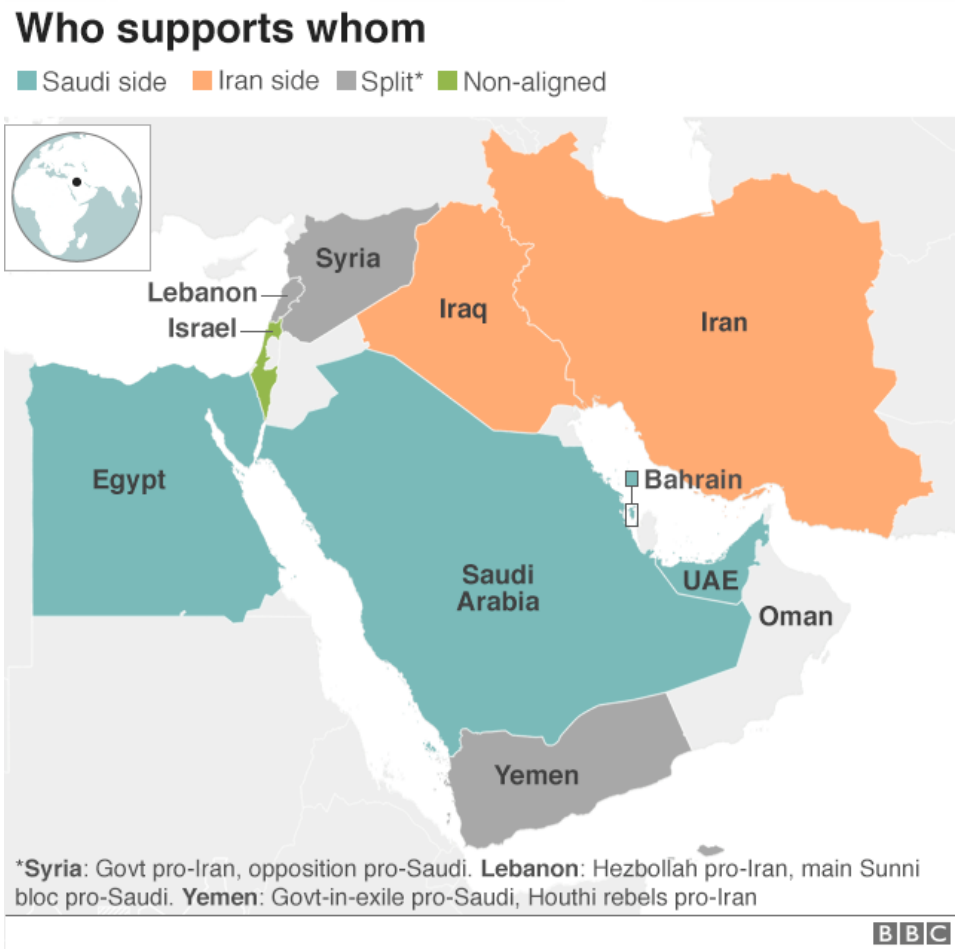
シリアの軍事情勢
(2017年10月)



シリアの軍事情勢
(2019年6月)



米国とイラン対立激化の背景
サウジアラビアとイランの覇権争い



イエメン　2011年ー2014年「国民対話」→2015年内戦勃発

(2011-2014)

ベノマー特使は、2011年の段階で、内戦を回避させ、暫定政権発足と、政治移行への「国民対話」を主催。

しかし「国民対話」の終了後、ハーディ大統領が6州による連邦制の導入を強行。

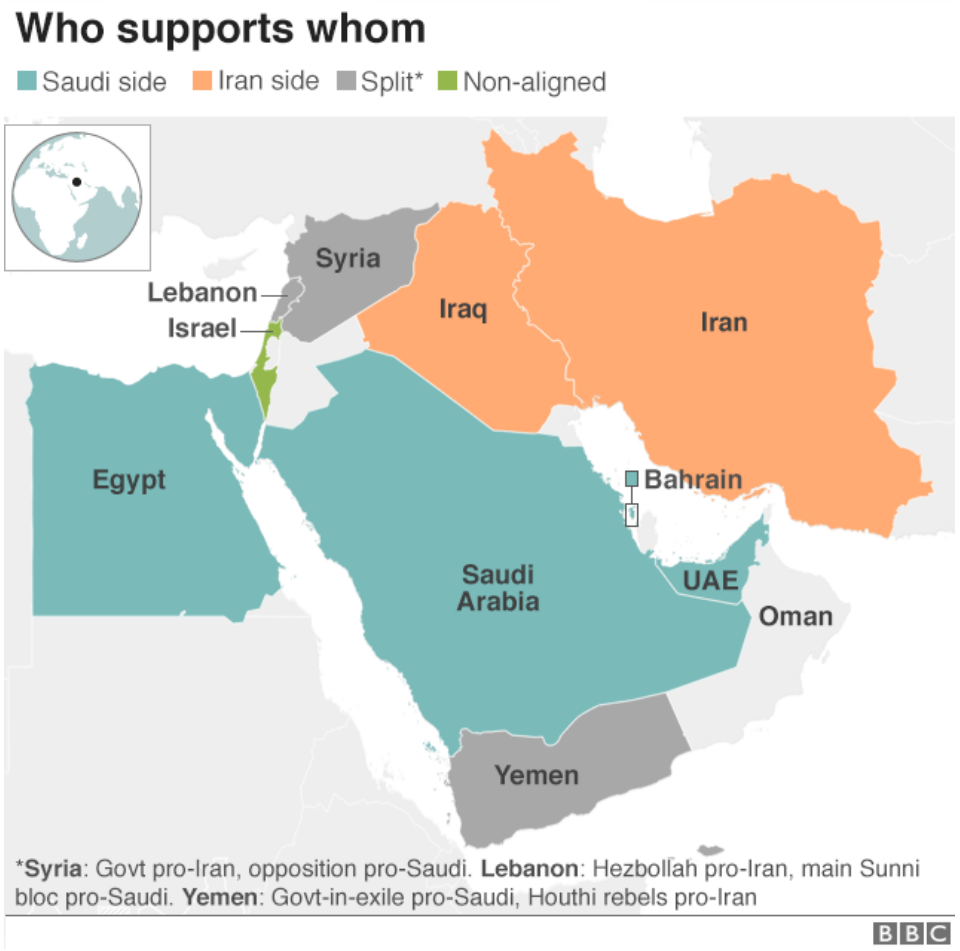
（2015年）

ホーシー派が武装放棄。

サウジとUAEが軍事介入

ベノマー国連イエメン特使

米国とイラン対立激化の背景
サウジアラビアとイランの覇権争い



スレイマニ司令官殺害への批判

ニューヨークタイムズ紙（２０２０年１月４日）

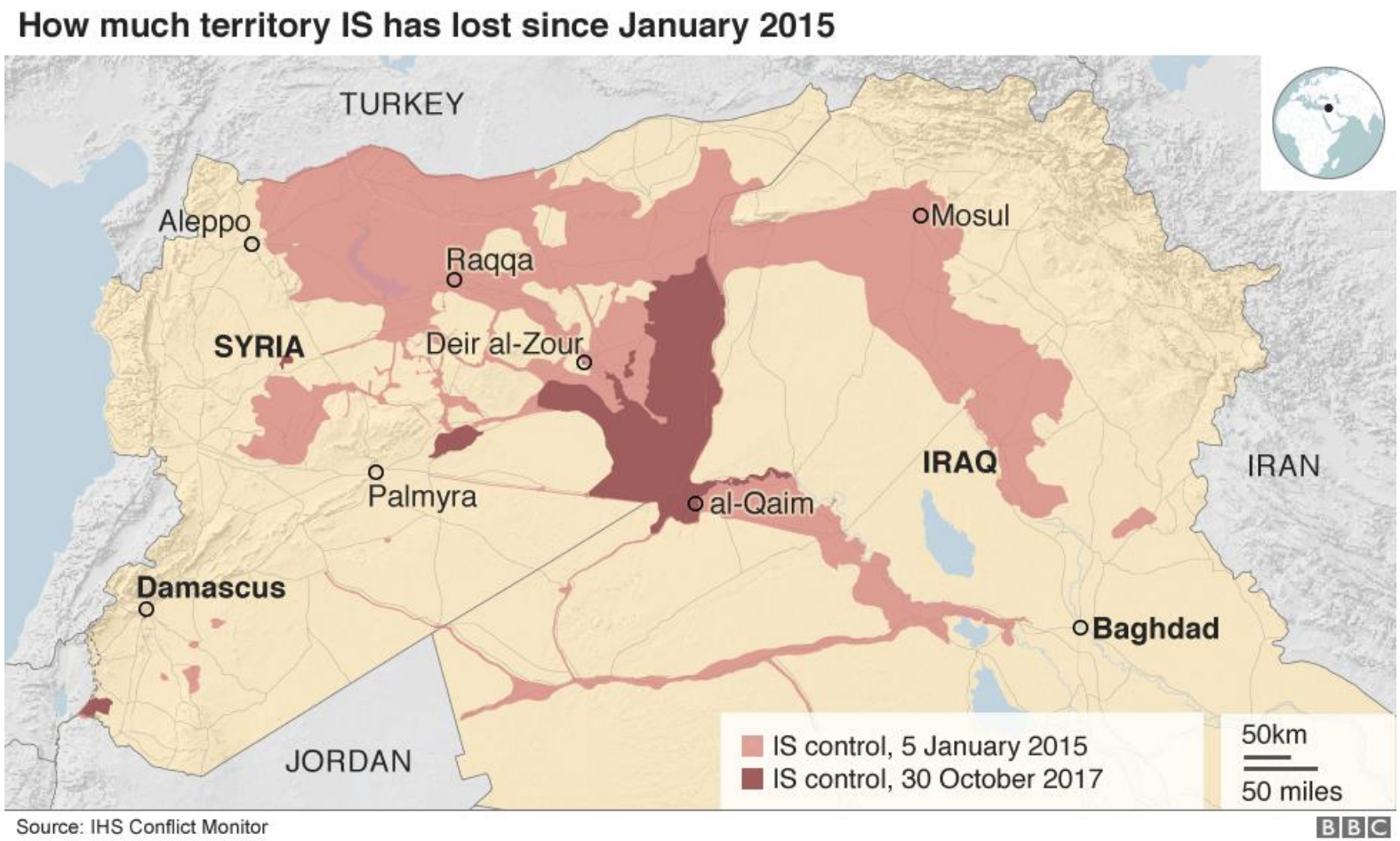
David D. Kirkpatrick記者

「スレイマニ司令官殺害は、ISIS(イスラム国）にとって二重の勝利」

１）ISISに対する最も有効な司令官が殺害

２）イラク国民の米国への反発→米軍のイラクでの活動が困難になるリスク

ISIS 支配地域 2015→2017



「内戦と和平」（日本の「グローバル・ファシリテーター」としての役割）

１）世界中には、異なる民族、部族、宗派などで、戦闘を繰り返している国がいくつもある。

２）日本は「平和国家」として培った信頼を活かし、色々なグループが対話をする促進者になることも、これからの貢献として考えられる。

３）グローバル・ファシリテーター（世界的な対話促進者」は、紛争だけでなく、環境問題、感染症問題、災害対策など、多くのグローバル課題について、日本が果たせる役割である。

日本が中東でできる役割は？

- ２月２日に、海上自衛隊の護衛艦「たかなみ」が中東に向けて出発。「調査・研究」目的
- 同時に、イランにも継続的に大臣や副大臣、政務官などを派遣し、米国とイランの意思の伝達の役割　（※シーア派の武装勢力が各個に軍事判断する可能性も）
- イランとサウジアラビアの共存がどうすれば可能か、両者の対話の促進を促す役割